

# ルイーゼ・オットー＝ペーターズ の生涯(Ⅲ)

——ドイツ工業化時代における女性就業問題 (2)——

## 采 女 節 子

- 1 はじめに
- 2 家庭——独立——
- 3 Paurskirche の時代——自由——
- 4 “Lex Otto” の時代——同権——
- 5 ADF の時代——組織——
- 6 Dr. Anna Kuhn timer の時代——職業——
- 7 19 世紀の社会変動と女性就業問題
- 8 おわりに

### 6 Dr. Anna Kuhn timer の時代——職業——

(1)

1895 年 3 月 15 日、ルイーゼ・オットー＝ペーターズはライプツィヒにおいて死去した。その死を看とった医師はアンナ・クーノウ Anna Kuhn timer であった。アンナ・クーノウはライプツィヒで開業した女医第一号であったが、ドイツの大学で医学を学んだのではなかった。スイスのチューリッヒ大学医学部で学び、医師の資格をとったのである。

ドイツの各州の大学が女性を正規の学生として受け入れるようになるのは、ようやく 1900 年から 1909 年にかけてのことであった。正規の学生というのは、男性の場合にならえば、ギムナジウム Gymnasium, 実科ギムナジウム Realgymnasium, 高等実科学学校 Oberrealschule のいずれかの卒業証書を

提出できる者という意味である。個々の講義への参加ということに関していえば、例えばハイデルベルク大学、ゲッティンゲン大学などでは既に女性の聴講が許されていたし、1890年以降は大部分の大学でそれを認めるようになっていた。すなわち、女性の大学入学に関してもドイツは、イギリスやアメリカはもちろん、ヨーロッパ大陸の他の国々よりも遅れていたのである。

隣国オーストリアでは、既に1878年に講義への規則的な参加が認められており、また大学入学に必要な準備教育機関、すなわち女性のためのギムナジウムの設立も進んで、1897年には16人の卒業生が哲学部に正規の学生として受け入れられている。

しかし女性の大学就学に関しては、スイスが最も解放的であった。チューリッヒ大学では1865年に女子学生の入学手続きが行われたという記録があり、1867年には学位獲得も可能となっている。1871年には27人の女性がチューリッヒ大学に学んでいる。続いてジュネーブ、ベルン、ヌーシャテル、バーゼルの各大学においても女性の入学が認められた。特にドイツ語圏のチューリッヒ、ベルンの大学における女子学生の比率は、まだ解放されていない国々からの留学生を含めて、かなり高いものになっている。1893/4年の学期では、全学部合計して学生の約10%が女子学生で、そのまた約10%がドイツからの女子学生であったという<sup>1)</sup>。

大学に入学して学ぶ目的は、それによって可能となる職業への参加という結果を目指している。女性の地位、権利一般についての原則的要求が、ルイーゼ・オットー＝ペータースによって創立された市民的女性運動、すなわち「全ドイツ女性協会」ADFの基本的立場であるからには、この要求にとって不利となり害となっている差別、障害の排除は、先ず達成されるものとして実証されるべきなのである<sup>2)</sup>。

そしてまた社会の状況は現実には、切実に女性の力を求めてもいた。それは特に医療の問題であった。社会の変動が女性の立場、意識に影響を与えるとすれば、それは女性により切実な問題をつきつけていたのである。家庭において、あるいは家庭外においてさまざまな労働に従事する女性は、精神的に

も身体的にも多くの困難、矛盾に直面するにもかかわらず、解決は男性の手にのみゆだねられているのである。いうまでもなく医療の分野は元来、むしろ女性的要素の支配するところであった。

「女性はいつでも治療を施す人であった。西欧の歴史において女性は免許を持たない医師であり、解剖学者であった。女性は中絶医で、看護婦で、カウンセラーであった。女性は薬草を栽培し、使用法の秘密を交換する薬剤師であった。女性は家から家、村から村へと旅する産婆であった。何世紀にもわたって女性は、書物や講義から閉め出され、互いに学び合い、隣人から隣人へ、母から娘へと経験を伝承する学位なき医師であった」<sup>3)</sup>

しかし近代科学技術の発展は、そのみが原因ではないにしても、ますます女性に無知を強制し、そのことによって医療の分野は男性の手に独占され、女性はその控え目な助手の地位に閉じ込められたのである<sup>4)</sup>。しかも「真の女らしさの永遠の法則」<sup>5)</sup>ともいうべきものに捉えられて、女性は医療の現場で正しい治療を受けられない状態にあった<sup>6)</sup>。医療の現場において女性が中心の役割を果たすことは、当時女性からの緊急の要請でもあったのである。

それ故「全ドイツ女性協会」ADF に代表される市民的女性運動による教育と就業活動の要求の中心には、先ず医学の解放が置かれたのであったが<sup>7)</sup>、それはまた、女性が立派に医学の勉強に適應することによって、女性の科学的能力に対する疑義や否定を打ち破り、それによって他の分野への女性の参加を容易にするという戦術もあったと思われる<sup>8)</sup>。

さらに、医学の勉学は他の分野の勉学に比べて、その勉強の直接の結果としての職業に最も結びついているという理由があった。従って勉学能力についての偏見以上に、このこと、すなわち医業に仕事として女性が従事すること、開業することに対して、男性からより大きい抵抗を受けたのである。

## (2)

ドイツにおいて医師として活動した最初の女性を特定することは難しい。

それは前述の通り、多くの女性が先祖伝来の、あるいは研究の結果としての知恵を働かせて医療の現場で活躍していたからであるが、それはさておき、近代的な勉学によって医師として認められ、医業に従事したと認められている女性はドロテア・レポーリン Dorothea Leporin (1715-1762) のようである。医師の娘であったレポーリンは、子供の時から父の仕事に興味をもった。娘の才能を惜しんだ父は出来る限りその勉強を応援した。結局当時新設のハレ大学に兄と共に入学を認められ、常に兄と同伴することで講義に出席することが許された。卒業後もやはり兄と共に医師として働き、その業績によって学位を授けられている<sup>9)</sup>。

しかし大学において男性と同様に勉学し、そのことによって男性と同様な意味で職業を持つ、そのことが女性の社会的地位の改革のための第一歩であるという意識をもって医学を学び、それを実践した最初のドイツ女性はフランツィスカ・ティブルティウス Franziska Tiburtius (1843-1927) といつてよいであろう。ティブルティウスは資産家の娘として生まれ、8人兄弟の中で育っている。後に自身も医師となった兄のすすめで、女子教員養成学校を経て医学の勉学の道に進んだ。1876年、チューリッヒ大学医学部を優秀な成績で卒業し(医学博士)、同じく学位を得た友人エミーリエ・レームス Emilie Lehmus (1841-1932) と共にドレスデンの「王立産院」に助手として一年間勤めた。この後二人は終生共同して仕事をするようになる。翌1877年二人はベルリンに診療所を開いた。当時既にプロイセンでは営業の自由が認められていたので、開業そのものに支障はなかったが、しかし様々ないやがらせ、特に男性医師(医師会)からの妨害に会わないわけにはいかなかった。「チューリッヒ大学医学博士」という看板をあげることもできず、死亡診断書を出す権利も認められなかったという。チューリッヒ大学医学部での勉学自体の困難な環境に数倍して、開業、営業に伴う苦労は大きかったのであるが、しかし結局ベルリンの労働者居住区の一つに診療所を経営することができたのであった<sup>10)</sup>。

1871年フランツィスカ・ティブルティウスがチューリッヒ大学医学部で

勉学を始めた時、医学部に在席する女子学生は20人を超えていたが、翌年には急激に増加して100人を超えている。そしてその大部分はロシア女性であった<sup>11)</sup>。チューリッヒにおけるロシアの女子学生に関しては、この主題とは直接関係のない政治的問題があったが、それにもかかわらずロシアの女子学生の大量入学は女子学生全体に影響を与えないではなかった<sup>12)</sup>。ティブルティウスの思い出によれば、真剣に医学を学ぶ気持が少い「短く切った髪、大きな黒眼鏡——これは多勢がかけているが、私にはその理由が全くわからない——、短い全く飾りのない、傘の袋のような衣服、黒い光沢のあるろう引きの船員帽、たばこ、そして女子学生に独得の黙り込んだ、陰気な、ぼんやりとした尊大な様子」の学生たちが、教授たちの神経にさわったことを紹介している<sup>13)</sup>。

当時、女性の大学入学、また特に医学の分野への参加に対する最も有名な反対者は、ミュンヘン大学の解剖学者テオドール・ビショッフ Theodor von Bischoff であった。

「神と自然の攝理によって女性は、看護活動や学問を職業とすること、そして中でも自然科学と医学を職業とする能力が欠けている。勉学に取り組むことや医学を職業とすることは、女性本来の最良の面、しとやかさ、内気さ、同情心、慈悲心と矛盾しており、それを損ってしまう」<sup>14)</sup>

ビショッフの論に限らず、反対論の中心にはやはり女性の能力問題がおかれており、そのいわば素朴な論理、むしろ感情の余りに単純な表現に、今更ながら当時の女性の存在の意味を考えさせられる<sup>15, 16)</sup>。

ところで、その頃チューリッヒ大学医学部で5年間(1876-1881)女子学生と共に学び、さらにその後2年間助手として女子学生も指導したある医師は、次のように述べている。

「女性の大学における勉学の問題は、次の三点にしばられると私には思われる。

- 1) 女性は——大部分の女性は——大学での勉学に適した能力があるか。

2) 大学で教育を受けた女性はその力を、自分自身のために、また他の人々のために有意義に活用できるか。

3) 女性はその勉学を通して、他の人々、特に男性の力を借りないで、  
 既得権に大きく挑戦できるか」<sup>17)</sup>

ティブルティウスの思い出にしても、またチューリッヒ大学医学部で学んだドイツ女性の次世代の一人アグネス・ブルーム Agnes Blum の思い出も、勉学の楽しさを強調しているが<sup>18)</sup>、その開業、営業の困難は前述の通りであった。特に市民的女性運動の基本方針の一つ、「自助」の精神は一層の努力を女性に求めることになったのである。

「どのような大きな困難や根深い偏見と闘ったのか、それは今の世代からはもはや想像もできない。この偏見に打ち勝ち、ひどく疑い深いのみならず、敵意にさえ満ちていた男性たちの承認を得ることに遂に成功した、彼女の医師としての素晴らしい仕事に感謝する。……数え切れないほどの人々を彼女は助けた。無数の貧しい病人を無償で診察し、援助した。後年彼女はアグネス・ブルーム Agnes Bluhm (ベルリンで初めての女性産婦人科医)、アグネス・ハッカー Agnes Hacker と共に女性医師のみの女性診療所を設立したが、それは今日最良の評判を得ている。死の2週前に彼女はこの病院に入院し、そこで亡くなった。1927年5月5日」<sup>19)</sup>

15年間にわたってティブルティウスとレームスはベルリンのただ二人の女医であったが、1890年には上記の二人がベルリンで開業し、その同じ年にアンナ・クーノウがライプツィヒで開業した。共にまだチューリッヒ大学で学んだ世代である。

### (3)

「人生の内容と目的の欠如、それに起因する内的な苦しみは、市民階級の女性の十字架である。しかし人々はこれについては何も知らず、何も聞かない。何故なら女性たちはそれを隠しているからである。その内的

な切迫した感情を誰に話せるというのだろうか。……女性もまたパンのみで生きるのではない。女性もまた苦しみと労働の義務を分担しなければならない。それが女性に人間性を与えるのである。労働への当然の参加が人間の生活の歩調を正しくするのだ。労働は人生の船に必要な喫水を与える積荷である」<sup>20)</sup>

とエザーベト・グナウク＝キューネ Elisabeth Gnauk＝Kühne (1850–1917) は 1895 年 6 月 5 日、エアフルトで開催された第 6 回福音社会会議の冒頭で講演した。この会議は初めて女性問題を主題として取り上げ、グナウク＝キューネは「女性の社会的地位」と題して会員に訴えたのである。

しかし女性には既に声をあげていた。しかも団結をして。「仕事、自由な解放された仕事、それは我々の団体の合言葉であり、我々が集う旗印である」<sup>21)</sup>。仕事、労働こそ女性団体の要求であったのにもかかわらず、ドイツではまだ多くの制約があった。

市民階級の女性たちには、既にかなり早くから「教師」の仕事が提供されていた。教職は恥しくない仕事とみなされたし、いずれ母親の役割を果すことになる女性にとっては良い訓練とも思われたのである。しかし女教師の職域はなお限られており、小学校と女学校低学年を担当できるだけであって、女学校高学年や、その上の女子教員養成学校にその席はなかった。そして大学での勉強が許されない以上、医師、法律家、高級官吏、牧師、研究者にはなれなかった。そして大学に入るためにはその準備教育が必要であり、従ってそのための学校が必要であった。

1895 年以降各地に高等女学校の中に 5 年間のギムナジウムのコースが設けられ、ここで規準の教育を受けた女性は、外部で大学入学資格試験を受けられるようになった<sup>22)</sup>。数多くの請願書が連邦議会や州議会に送られ、長時間にわたる議論があり、数多くの小冊子類が出された後に、1899 年 4 月 24 日連邦参議院は、医師試験、歯科医師試験、薬剤師試験が男性と同等の条件のもとに女性にも解放されるべきであると決議した<sup>23)</sup>。

「全ドイツ女性協会」ADF は、ほとんど数え切れないほどの請願書を各方

面に送り続けたが、その間 1879 年には大学で学びたい女性のための奨学金制度を設け、それは 1889 年までに 13 万マルクに達したという。1885 年には特に医学、化学、薬学を学ぶ女子学生のための奨学金も設けられ、また女子ギムナジウム設立のための募金も行われた。

1894 年、この資金によってつくられたライプツィヒ女子ギムナジウムコースの開校式が行われたが、その式典への出席がルイーゼ・オットー＝ペータースがかけの場に姿を現わした最後の機会であった。そしてこの学校の初代校長はハイデルベルク大学で哲学博士の学位を得た最初の女性であったケーテ・ヴィントシャイト Käthe Windscheid であった。またテュービンゲン大学で学んだ最初の女性、1896 年に理学博士の学位を得たマリア・グレーフィン・フォン・リンデン Maria Gräfin von Linden は、「全ドイツ女性協会」ADF のこの奨学金の奨学生だったのである<sup>24)</sup>。

#### 註

- 1) Neustätter, Dr. Otto: Das Frauenstudium im Ausland. Ein Ueberblick über die Zulassung der Frauen zu Mittel- und Hochschulen, sowie zu den akademischen Berufen in den ausserdeutschen Kulturländern", Sonderdruck aus der Beilage zur "Allgemeinen Zeitung" Nr. 237, 258, 263, 264 vom 19. Okt., 19. Nov. und 21. Nov. 1898 (München, August Schupp, 1899) による。

この資料にはヨーロッパ 14 ケ国、その他 16 ケ国の女性の大学勉学の歴史、現状について記されている。日本についても記載がある。ただし数字に関しては他の資料との間にやや異同がある。

- 2) Louise Otto=Peters: Das Recht der Frauen. Neue Bahnen XXVII, 19. (1. Oktober 1892), in: Jahres, Ruth-Ellen Boetcher (Hg.): Die Anfänge der deutschen Frauenbewegung Louis Otto=Peters (Frankfurt am Main, Fischer, 1983) P. 216-221

なお、拙稿：ルイーゼ・オットー＝ペータースの生涯——ドイツ工業化時代における女性就業問題(Ⅱ)——(甲南女子大学紀要第 27 号、平成 2 年) P. 117-119 参照。

- 3) エーレンライフ, B./イングリッシュ, D. 著, 長瀬久子訳「魔女, 産婆, 看護婦——女性医療家の歴史——」(東京, 法政大学出版局, 1996) P. 3
- 4) Schwarbe, Prot. Dr. J.: Über das medizinische Frauenstudium in Deutschland.



- (Leipzig, Georg Thieme, 1918) P. 7.
- 5) Programm der Frauenzeitung Nr. 1, 21. April 1849, Gerhard, Ute/Hannover = Drück, Elisabeth/Schmitter, Romania (Hg.): "Dem Reich der Freiheit werb'ich Bürgerinnen" Die Frauen-Zeitung von Louise Otto. (Frankfurt am Main, Syndikat, 1979) P. 37
  - 6) 女性の医学, 医療への参加を求めることに関するあらゆる資料に, 多かれ少かれこの状態及び理由についての言及がある。
  - 7) Gerhard, Ute: Unerhört. — Die Geschichte der deutschen Frauenbewegung — (Reinbeck bei Hamburg, Rowohlt, 1990) P. 160
  - 8) Lehmann, Prof. Dr. K. B.: Das Frauenstudium. gestatteter Sonderabdruck aus der "Beilage der Allgemeinen Zeitung" München, Nr. 141, 142. (Wien, Verein erweiterte Frauenbildung, 1899) P. 4
  - 9) Schiebinger, Londa: Schöne Geister. — Frauen in den Anfängen der modernen Wissenschaft — (Stuttgart, Klett Cotta, 1993) P. 350–360  
The Mind has No Sex? — Women in the Origins of Modern Science — (Boston, Harvard Univ. Press, 1989)
  - 10) Gerhard 前掲書 7) P. 160–161
  - 11) 同上書 P. 160 ただし数字的にはやはり多少の異同がある。  
Kronfeld, H.: Das Frauenstudium der Nationalökonomie. Sonderdruck aus dem Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik. (Berlin, Karl Heymanns, 1899) P. 13–14  
によれば, 女子学生 90 人, そのうち 88 人がロシア女性となっている。
  - 12) ロシアの反政府運に加担する左派のロシア人は, 男性であれ女性であれ, 外国で暮す許可を得るために大学に登録をしたのである。
  - 13) Tiburtius, Franziska: Erinnerungen einer Achtzigjährigen. (Berlin, Schwetschke, 1923)
  - 14) Bischoff, Theodor L. W. v.: Das Studium und die Ausübung der Medicin durch Frauen. (München, Riedel, 1872) P. 45
  - 15) 当時の, 反対論を紹介している本。  
    - Schwarbe 前掲書 4)
    - Neustätter 前掲書 1)
    - Bernatzik, Edmund: Die Zulassung der Frauen zu den juristischen Studien. (Wien, Selbstverlage des Vereins für erweiterte Frauenbildung, 1900)
    - Herkner, H.: Das Frauenstudium der nationalökonomie. Sonderdruck aus dem Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik. (Berlin, Karl Heymann, 1899)

- Kronfeld 前掲書11)
  - Lasser, O.: Das medizinische Studium der Frau. (Berlin, S. Karger, 1897)
  - Lehmann, K. B. 前掲書 9)
  - Kleinwächter, Ludwig: Zur Frage des Studiums der Medizin des Weibes. (Berlin, Heuser's, 1896)
  - 16) 解剖学の教授たちの感想が、しばしば女子学生能力についてではなく、女子学生の感情的反応に向けられていることは興味深い。  
Kronfeld 前掲書 11) P. 14
  - 17) Lehmann 前掲書 9) P. 4
  - 18) Kronfeld 前掲書 11) P. 14-15
  - 19) Nachrichten. Zentralblatt des Bundes Deutscher Frauenvereine. Ausgabe xxix Jahrgang, Nr. 5, Mai 1927 (BDF-Archiv in Landesarchiv Berlin) ティブルティウス死亡記事。
  - 20) Berichte der Verhandlungen des Evangelisch-Sozialen Kongresses. 1890-1929. (Berlin-Göttingen, Rethwisch & Langewort, 1890-1929) P. 82-136
  - 21) Joeres 前掲書 2)
  - 22) 正規の教科内容については クラウル, M. 著 望月幸男他訳「ドイツ・ギムナジウム 200 年史——エリート養成の社会史——」ミネルヴァ書房, 1986 P. 100-を参照。
  - 23) この間の複雑な状況については Huerkamp, Claudia: Frauen, Universitäten und Bildungsbürgertum. Zur Lage studierende Frauen 1900-1930. in: Siegrit, Hannes (Hg.): Bürgerliche Berufe. (Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1988) 及び, Habeth, Stephanie: Die Freiberuflerin und Beamtin.——Ende 19. Jahrhundert bis 1945——. in: Pohl, Hans (Hg.): Die Frau in der deutschen Wirtschaft. Zeitschrift für Unternehmensgeschichte Beiheft 35. (Stuttgart, Franz Steiner, 1985) を参照。
  - 24) Junginger, Gabriele (Hg.): Maria Gräfin von Linden. Erinnerungen der ersten Tübinger Studentin. (Tübingen, Attempto, 1991)
- 参考文献については次稿に記す。